方向

第一六四号　一九九四年五月一日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

カラヴィンカのように声よき人 ―法華経巡礼　九一―

1994 04 21 原田憲雄

07-25. さてまた、比丘たちよ、そのとき東南の方向のあの五十千万億の世界で、梵天の神車が、非常に光を放ち、熱し、輝き、映え、きらめいた。そのとき、比丘たちよ、梵天たちはこう考えた「これら梵天の神車が、非常に光を放ち、熱し、輝き、映え、きらめいているが、これはどのようなことの前兆であろうか」と。そこで、比丘たちよ、これら五十千万億の世界で、かれら大梵天たちはすべて、たがいに宮殿を訪ねて、報告しあった。

tena khalu punar bhikṣavaḥ samayena pūrva-dakṣiṇe dig-bhāge teṣu pañcāśatsu loka-dhātu-koṭī-n-ayuta-śata-sahasreṣu yāni brāhmāṇi vimānāni tāny atīva bhrājanti tapanti virājanti śrīmanty o-jasvīni ca / atha khalu bhikṣavas teṣāṃ brahmaṇām etad abhavat / imāni khalu punar brāhmāṇi v-imānāny atīva bhrājanti tapanti virājanti śrīmanty ojasvīni ca / kasya khalv idaṃ pūrva-nimit-taṃ bhaviṣyatīti / atha khalu bhikṣavas teṣu pañcāśatsu loka-dhātu-koṭī-nayuta-śata-sahasreṣu ye mahā-brahmāṇas te 'pi sarve 'nyonya-bhavanāni gatv 'ārocayāmāsuḥ //

07-26. そのとき、比丘たちよ、大悲という名の大梵天が、この梵天の大集団に対して、偈で話しかけた。

atha khalu bhikṣavo 'dhimātrakāruṇiko nāma mahā-brahmā taṃ mahāntaṃ brahma-gaṇaṃ gāthābhir ady-abhāṣta (W: abhāṣata) //

07-27. いかなる前兆なのだろうか、友よ、いま、見られるのは、
いっさいの神車が、光を放ち、最上に豪華なのが。（二六）
あるいは福徳の天子が、いま、ここに来たので、
その威神力によって、一切の神車が素晴らしいのだろうか。（二七）
または、仏、両足あるものの最高の方が、この世間に現れ、
その威神力によって、いま、神車がこのようであるのか。（二八）
みな一緒にわたしたちはたずねよう、これは小さな原因によるのではない、
このような前兆は、じつに、いまだかつて見たことがないのだから。（二九）
四方をたずね、わたしたちは、幾千万の国土を遍歴しよう。
はっきりしているのだから、世間にいま、仏が出現されたことは。（三〇）

kasya pūrva-nimittena māriṣā adya dṛśyate /
vimānāḥ sarvi bhrājanti adhimātraṃ yaśasvinaḥ //26//
yadi vā deva-putro 'dya puṇyavanta ih 'āgataḥ /
yasyeme anubhāvena vimānāḥ sarvi śobhitāḥ //27//

atha vā buddha loke'sminn utpanno dvi-padottamaḥ /
anubhāvena yasyādya vimānā imi īdṛśāḥ //28//
sahitāḥ sarvi mārgāmo naitat kāraṇam alpakam /
na khalv etādṛśaṃ pūrvaṃ nimittaṃ jātu dṛśyate //29//
catur-diśaṃ prapadyāmo ańcāmaḥ kṣetra-koṭiyo /
vyaktaṃ loke'dya buddhasya prādurbhāvo bhaviṣyati //30//

07-28. さて、比丘たちよ、これら五十千万億の梵天たちも、それぞれに梵天の神車に乗り、スメールの山のようにうずだかい花うてなをもって、四方を巡歴し、西北の方に向かって行進した。そして、比丘たちよ、大梵天たちは西北の方で見た、あの世尊・大通智勝如来・尊敬されるべき・正しく覚ったかたが、最勝の菩提道場にいたり、菩提樹の下の獅子座につき、諸天、龍、ヤクシャ、ガンダルヴァ、アスラ、ガルダ、キンナラ、マホーラガ、人間と人間ならぬものに取り巻かれ、尊敬されているのを、また息子の十六人の王子が教えの輪を廻されるようお願いしているのを。見たかれらは、その世尊・大通智勝如来・尊敬されるべき・正しく覚ったかたに近づき、世尊の両足を頭にいただいて拝礼し、世尊を幾百千回も右廻りにまわったのち、スメール山のようにうずだかい花うてなを世尊の上に撒き散らし、高さ十ヨージャナのあの菩提樹にも撒き散らした。撒き終ってかれらは梵天の神車をあの世尊に奉献した「世尊は我々をいつくしんでこの梵天の神車をお受けください、スガタは我々をいつくしんでこの梵天の神車をお使いください」と。

atha khalu bhikṣavas tāny api pañcāśad-brahma-koṭi-nayuta-śata-sahasrāṇi tāni svāni-svāni divyāni brahmāṇi vimānāny abhiruhya divyāṃś ca sumeru-mātrān puṣpa-puṭān gṛhītvā catasṛṣu dikṣv anucaṅkramanto 'nuvicaranta uttara-paścimaṃ dig-bhāgaṃ prakrāntaḥ / adrākṣuḥ khalu punar bhikṣavas te mahā-brahmāṇa uttara-paścime dig-bhāge taṃ bhagavantaṃ mahā-bhijñājñānābhibhuvaṃ tathāgatam arhantaṃ samyak-saṃbuddhaṃ bodhi-maṇḍa-varāgra-gataṃ bodhi-vṛkṣa-mūle siṃh 'āsanopaviṣṭaṃ parivṛtaṃ puras-kṛtaṃ deva-nāga-yakṣa-gandharvāsura-garuḍa-kiṃnara-mahoraga-manuṣyāmanuṣyais taiś ca putraiḥ ṣodaśabhī rāja-kumārair adhyeṣyamāṇaṃ dharma-cakra-pravartanatāyai / dṛṣṭvā ca punar yena sa bhagavān mahābhijñājñānābhibhūs tathāgato 'rhan samyak-saṃbuddhas tenopasaṃkrāntā upasaṃkramya ca tasya bhagavataḥ pādau śirobhir vanditvā taṃ bhagavantam aneka-śata-sahasra-kṛtvaḥ pradakṣiṇī-kṛtya taiḥ sumeru-mātraiḥ puṣpa-puṭais taṃ bhagavantam abhyavakiranti samābhiprakiranti sma taṃ ca bodhi-vṛkṣaṃ daśa-yojana-pramānam / abhyavakīrya tāni brāhmāṇi vimānāni tasya bhagavato niryātayāmāsuḥ / parigṛhṇātu bhagavān imāni brāhmāṇi vimānāny asmākam anukampām upādāya / paribhuñjatu sugata imāni brāhmāṇi vimānāny asmākam anukampām upādāya //

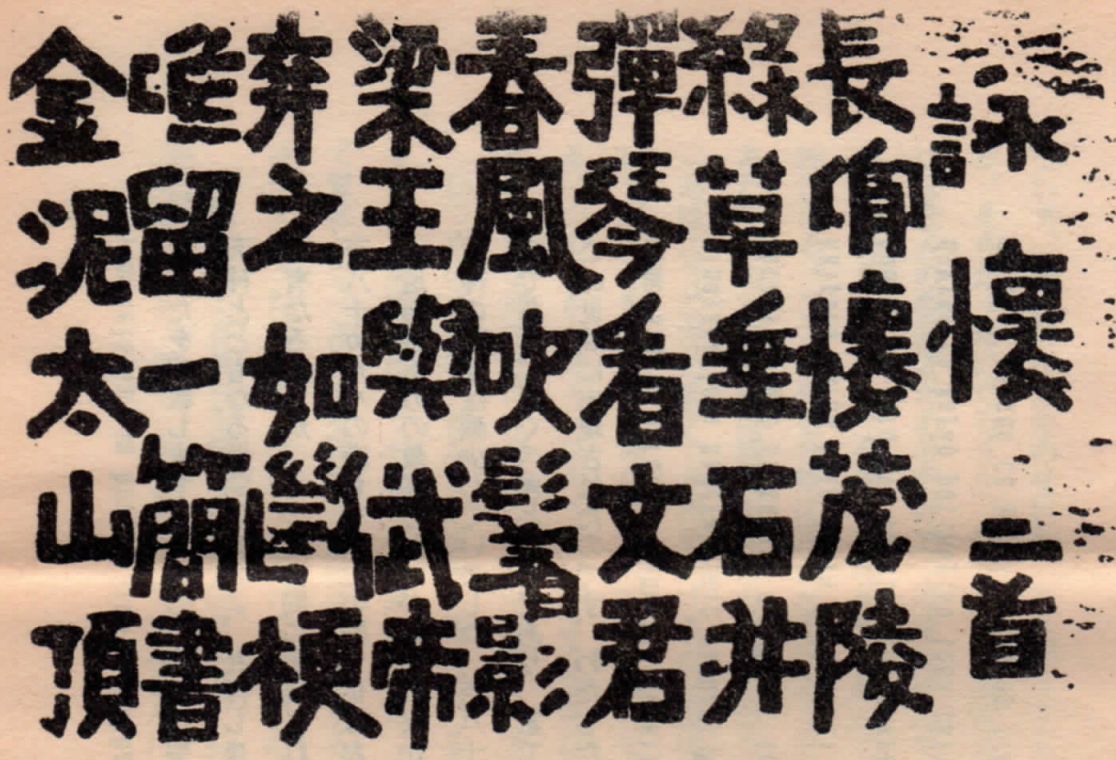
07-29. そこで比丘たちよ、かれら大梵天たちは、それらのものの神事を主尊に奉献し、そしてこのふたりに囲まれて、その主尊をものあたりに讃嘆した。

atha khalu bhikṣavas te mahā-brahmāṇas tāni svāni-svāni vimānāni tasya bhagavato niryātya tas-

yāṃ velāyāṃ taṃ bhagavantaṃ saṃmukhaṃ ābhiḥ sārūpyābhir gāthābhir abhiṣṭuvanti sma //

07-30. あなたを尊敬します、無比の、偉大な聖仙、天神のなかの天神、カラヴィンカ鳥のように声よき人。
天神とともなる世間の導師よ、礼拝します、世間に好意と共感をもつかたよ。（三一）
希有なるかたが、やっと世間に出現されました、久しい後のいま、救済者よ。
百八十カルパの満ちるまでの間、仏はおられませんでした、人間世界に。（三二）
両足あるものの最高のかたがおられなかった間、悪道は充満し、
天神の集団は減少していました、百八十のカルパの満ちるまでの間。（三三）
眼であり、行くべきところであり、家であり、避難所であり、父であり、親族であるかたが、
この世間に出現されたのです、わたしたちの福徳により、好意と共感を持つ法の王が。（三四）

namo 'stu te apratimā maha-ṛṣe devātidevā kalaviṅka-susvarā /
vināyakā loki sadevakasmin vandāmi (W:vandāma) te loka-hitānukampī //31//
āścarya-bhūto 'si kathaṃ-cil (W:ci) loke utpannu adyo sucireṇa nātha /
kalpāna pūrṇā śata śūnya āsīd aśīti buddhair ayu jīva-lokaḥ //32//
śūnyaś ca āsīd dvi-padottamehi apāya-bhūmī tada utsad 'āsi /
divyāś ca kāyāḥ pa'ihāyiṣū tadā aśīti kalpāna śatā supūrṇā //33//
so dāni cakṣuś ca gatiś ca leṇaṃ trāṇaṃ pitā ca (W:co) tatha bandhu-bhūtaḥ / 〔以下は一九頁〕



山本のぶを刻（一九八七　一）

李賀　詠懷　二首（其一）

感想　その一

長卿が思いにふける茂陵では
みどりの草が石の井戸に垂れさがる
琴ひいて女房の文君みれば
春風がそよろと髪の影を吹く
梁王だって　武帝だって　当人を
こっぱみたいに見捨てておいて
わずかに遺した一巻の《封禅文》は
太山にお供えだ　金泥で櫃にとじこめて

長卿（ちょうけい）は、前二世紀の司馬相如（しば しょうじょ）の字。漢の梁孝王や、武帝に仕えたが不遇で、茂陵に隠居した。死後、武帝が遺文を求めさせ、妻の卓文君が献上したのが、皇帝が天地を祭る儀式用の封禅書だった。（1994 04 14 憲雄）

高雄から清滝へ

1994 04 21　原田　慶

高雄の神護寺のしだれ桜を見に行くようになってどのくらいになるだろうか。毎年、四月十七日の前後を目あてにしているのだが、年々、同じ桜のすがたに出会うことはない。咲き誇って美しい桜を見られる年もあり、散り終わって寂しい桜に会うこともある。

神護寺に桜の木は少なく、楼門を入ってすぐにしだれ桜の若木が一本、広い境内の白砂に映えて華やかに咲いている。そこから奥へ進んで同じほどの木が五大堂の後ろ、金堂への石段の下に一本ある。この花は若いがよくしだれて美しい。そこから広くて高い石組の段を上がると金堂の前に大きなしだれ桜が一本ある。この花がみごとに咲くのである。あとはかわらけ投げで知られる地蔵院のほうに背の高いしだれ桜があるが、あまり高いところに咲くので、遠く離れて見たほうが美しい。他に山桜は何本もあって、花の大きいもの小さいもの、赤みをおびた葉のかげに白く咲いて静かである。

ことしは十八日の月曜日に出かけた。午後からは雨という予報だったので、少し早く八時ごろに家を出て、初めに広沢の池のあたりの桜を見たがこれはほとんど散っていた。池の向こう側の遍照寺山が春の色に美しく、朝もやに少しぼんやりして、思いがけず美しかった。

少し後戻りしてバスを乗り継ぎ、高雄で下車して、神護寺に十時すこし前に登り着いた。今年の桜は散り初め

ていて、気候の不安定のせいか、花色がうすく、勢いが弱いように思った。どこの桜も花のつきが悪いと聞いたが、そうだったのだろうか。修学旅行の高校生のグループ二十人ほどが金堂でお坊さんのお話を聞いていた。他には数人の参詣者があるだけで、高雄は冷んやりとしずまりかえつている。ウグイスがさかんに鳴いて、山の空気をやわらげていた。金堂の薬師如来を拝んで、横の坂を下り、弘法大師の名水が湧く閼迦井の前を通って地蔵院に出る。ここの桜も今年は花色がずいぶん白く見えた。広い庭園は谷側が、外に向かって切り開かれていて、あたりの山々を眺め清滝川を見おろすことができる。茶店の人と若いお坊さんが、話しながら草取りをしていた。

「おはようございます」と声をかけると、おばさんだけが挨拶を返してくれた。ここから見渡す景色を錦雲峡というが、下を流れる清滝川に沿って道がついていて、あすこを歩いてみたいものだといつも思いながら眺めている。山の下から時々「ワー」というような叫び声が聞こえてくる。修学旅行の団体が騒いでいるのかと思ったが、その唐突な声の上げ方が何となく不自然で、下をのぞいてみたが人の姿はまったくなかった。

いつものように、並んでしばらく眺めているうちに、まだ十時をすこし過ぎたところだから、あの川沿いの道を歩いて清滝に出ようかという相談になった。高雄から清滝まで一時間もあれば出られるだろうと言うことなので賛成して、さっそく神護寺を降ることにする。今までは和気清麻呂公のお墓まで山を登ったり、西明寺や高山寺へまわったりしてこの近くを歩いていたのだった。

楼門を出て自然石を組んだ急な段を降る。弘法大師が天に向かって筆をふるわれたという硯石のところから右へ坂道になる。途中、安全祈願のお地蔵さんに挨拶をして、また左へ急な石段を降りた。石の間にネコノメ草が、

いかにもそれらしい形で目を光らせている。下に着いて、清滝側を渡らずにそのまま山の下を右へ折れて川沿いに降って行く。山の下に旅館が何軒か並んでいるところを過ぎると堰が作られていて、菖蒲谷池のほうへ水が取られているらしい。嵯峨の田畑の灌漑のために造られた池だそうである。堰の川しもに橋があって道は対岸に移る。橋のたもとにトラックが止まっていて映画のセット用の大道具がたくさん積まれており、橋の下で撮影が行なわれていた。野良着姿の人が石を割ったり、もっこでそれを運んだりしているところらしい。陣傘をかぶった大官のような人が帳面を片手に何か話している。まだ本番ではないようで、川に石を投げ込んで遊んでいる人もある。監督らしい人は、道で、ジーンズをはいた二人の女性に何か話している。神護寺の上にいたときに「ワー」と声をあげていたのはこの人たちなのだろう。俳優さんは男性ばかりで、見覚えのあるような顔はなかった。気候がよいので、このしんきくさいような撮影をしている人たちもしんぼうしやすいことだろうと思って通り過ぎた。左は斜面で右下の川には大きな石がごろごろしている。そのあたりの山は杉が切られて、若い杉苗が植えられているので明るく開け、山の中腹をさきほどの堰からの水路が走っている。あちこち、山から浸み出してくる水が、わたし達の足もとをびしょびしょにするが、このようにして流れ込む水が、堰かれて減った水の勢いをまた少しずつとりもどしてゆくのかも知れない。天を見上げるとちょうど神護寺の地蔵院の庭があり、そこから見渡す景色の中にわたし達がいるのだった。川原の大きな石の上に降りて、バス停で買った缶入りコーヒーを飲んでから、いよいよ本気で歩き出した。

植林された山の斜面は陽あたりもよく、ミヤマキケマンの群生やショウジョウバカマも見られる。アザミの大

きな株が白いとげを光らせている。小さなスミレが群れて咲く。川には十センチほどの小さな魚がまっすぐにすうっと泳いで、水が光るのですぐに見えなくなる。川の行く方向を見ると、山が入り組んで、谷あいにまた向こうの山が重なり、若葉に山桜がまじり、杉の濃い緑がその中に突き出ている。「ワーきれい、ほんとにきれい」そこから動くのが惜しいほどの春の眺めであった。そこからしばらく歩くと道は川を渡ってまた右岸になる。景色は変って川の両岸に山がせまっている。山裾の川岸を行くと、少し山が引きこんだ狭い平地があり、キャンプをするのか、丸太で造ったテーブルをはさんでやはり丸太の腰掛のセットされたのが三組、土に打ち込んであった。そこを過ぎるとまた両岸は深い山で、浸み出した水が岩肌をしたたり落ちているところもある。小さな谷川も流れ込む。山椿がころころと一面に散っていて、見上げると茂みの中に、わずかに残った花がのぞいている。

川は少しずつ水量が増えて、向う岸の大きな岩の下などは青々した深みになり、うす暗くて、魚などはなにも見えない。道に突き出ている岩を踏み越え、浸み出した水でぐしょぐしょになった落ち葉に足を取られないように気をつけながら通りすぎる。一息ついて振り返ると川がなんとも言いようのないなつかしさで流れて来る。水が後から追ってくるように思って見ていると、わたし達を追い抜いてぐんぐんと走って行ってしまう。

「四郎さんがこの道のことよう言うてはりましたね。ここに居はったら、どんなに喜ばはるやろうに。あの人はこんなにきれいなところを歩いてはったんですね。ひょっとしたら今もこのへんを飛んではるかもしれませんよ。もう歩かんでもいいし身軽やもの。『高雄から清滝まで川に沿うて歩く道がつけておす。いっぺん行っとおみやす。それはきれいなとこどすわ、ほんまによろしおっせ』なんて言うてはったけど、わたし達の来たのを見

て『どうどす、よろしおすやろ、この近辺でこれだけ美しいところはちょっとおへんなあ』ふわっふわっなんてねえ」

「そうやな、四郎さんは山歩きが好きやったなあ、あの人も孤独な人やったのかもしれん」

「人の世話はようしはったさかい、お葬式にはお友達もたくさん来てはりましたけど、親友はなかったと奥さんが言わはりました。一人で居るのが好きやったのかもしれませんねえ」

四郎さんはご夫婦で、毎月きちんと墓参に来られた。どの墓へもシキミとお水お線香を供え、ゆっくりおがんでから本堂へ上がって、しばらく話をして帰られるのだった。山を歩くときに鉄道唱歌をうたいながら歩くと調子がよいと言われたことがあった。戦後、シベリヤに抑留されていたときのことも少し、草を食べたことや、冬に仲間の死体を埋めると、春になって雪が解け、みんな出てくるのだというようなことを話されたが、あまりくわしくは言われなかった。真面目を絵に描いたような人で、容貌は歌舞伎俳優のように垢抜けしていた。上七軒のお茶屋の生まれだったから、葬儀には舞妓さんが白いこよりで髪を結い、足袋もなしで雨の中を参列しておられたのが印象に残っている。友達にもらったからとチューリップやラナンキュラスなどの球根を持ってきてくださったのが、今年も墓地で花を咲かせている。昨年の十月二日、八十三歳だったが、急に亡くなった。

清滝川がだんだん道より低いところを流れるようになった頃、右手前方から流れてくる谷川があった。清滝川よりは川巾が狭いが水量はたっぷりして、水が透きとおっている。これを見ると、きれいだと思っていた清滝川の水も、すこし疲れているのかもしれないと思う。「こちらの水は、飲めそうなくらいきれいですね。この水は

人の住むところを流れてきた水ではないようですよ」などと言っていたが、地図で調べてみると、愛宕山の谷あいを流れ出て、月輪寺の下を通り、空也の滝を通って流れてくる堂承川というのだった。道はしばらく堂承川の左側の山の中を通り、途中から川を離れて左の方向へ山を登ると、清滝から月輪寺へ行く道と出あった。月輪寺は空也上人が若いときに修行された寺だそうである。月輪寺へ行くにはけわしい山道を、わたし達が今、来たのと同じほど行かなければならないらしい、どちらも三キロメートルということで、距離にするとそれほど遠くもないのだけれど、かなり急な坂だという。わたし達は下りに向かった。そのあたりで初めて、山に登ってくる人に出会った。連休前の月曜日だから、歩いている人はなくて、誰にも出会わずに来たのである。清滝川は、道と雑木林を隔ててずっと下のほうを流れている。その先のほうに清滝の集落が見えてきた。公園らしいところやキャンプ場が見え、桜も咲いている。人の姿は見えないが、広い駐車場があり、自動車の音がする。愛宕神社への登り口にあたるこの町には旅館や休憩所もあって、夏にはにぎわうのだろうけれど、今はまだ静かである。金鈴橋を渡って清滝川と別れ、坂を登って行く。途中の家々は人の気配もなく玄関を閉ざし、道端に竹の子がにょっきり出ていたり、みごとに美しいムラサキケマンが咲いていたりする。バスの終着駅、清滝の駐車場は広くて山桜が咲いていた。ここでバスは方向を変えて三条京阪駅へ帰って行くのである。わたし達は千本丸太町で降りれば歩いても家まで近い。ここで十一時五分だったから高雄から清滝まで四十五分くらいかかったのだろうか。帰り着いたのが十二時三十分、ずいぶんたっぷりした半日を過ごした。

友の書

1994 04 22

原田憲雄

上原淳道『中国史論集』
荒井健『中華文人の生活』

むかしアナトール・フランスのものが気に入って、ぼつぼつ手に入れた翻訳本のなかに『友の書』というのがあった。内容をすっかり忘れているので読み返そうと本棚をさがしたが、他のあれこれはあるのに、目当てのものが見つからない。百科事典を見たら、自伝的な随筆、とある。そうだったろうか。そんな気がしないのだが。まあいい。友から贈られた本について書き留めておくのに、たまたま浮かんだ題のひとつにすぎないのだから。もっとも、「友」と思い込んでいるのはわたしのほうだけで、上原氏も、荒井氏も、わたしを「友」などとは、思っておられぬかもしれぬ。そうだとしても、この二冊は《友の書》と呼ぶにふさわしい本だと思う。

『中国史論集』は、一九九三年七月発行。A5で六三八ページの大著。編集人、柳田節子・後藤均平・坂本健彦氏の「編集あとがき」を左に抜き書きする。

〔本書は、上原淳道さんが、一九五一年から九一年までに発表された諸論考の選集である。Ⅰには、論文・叙述の類を、Ⅱには、書評・教育・平和運動等にかんするものを、収めた。おおむね発表年順に配列してある。／上

原さんは、自分が書いたものを自分で編んで自分で上梓しないお方である。よって後進のわたくしたちが、かってに編集した。ゆえに論考の選択、刊行の責任はすべてわたくしたちにある。／……／上原史学の全貌をうかがうためには、本書のほかに、上原淳道著作選Ⅰ『政治の変動期における学者の生き方』（一九八〇年刊）と、同Ⅱ『夜郎自大について』（一九八二年刊）の編著がある。併せ読まれんことを。／一九二一年に生まれた上原さんは、今年数えで七十三歳。ますます健舌と健筆と、そして御加餐をねがうしだいである。」

わたしが著者からもらったのは夏だったのに、秋の終わりにちかくなって、やっと礼状を書いた。

〔拝復　先日、十一月二日付のお手紙と『読書雑記』三八五号をいただきました。ありがとうございます。お返事と『方向』一六〇号をいっしょにと思っておりましたが、都合で別便でさしあげます。／鄭重なお見舞いのお言葉、恐縮に存じます。申し上げるほどのことではないのですが、かえってご心配いただくことになりました。右の目が白内障で見えなくなり、九月末に手術を受け、おかげさまで経過はよく、朝の空のような明るさになりました。ところが、左のほうがやはり白内障で少しずつ進んでおり、夕昏れの空の明るさで、これはまだ手術の段階ではないらしいのですが、別に眼圧が高く、薬で押さえています。読み書きは控え目にということで、怠け者には何よりの言葉、聞く暇のなかったCDをかけて楽しむ時間が増え、これも与えられた恵みと感謝しています。／しかし、まったく本から離れることも寂しく、ぼつぼつご著書も拝見していますが、物忘れがはなはだしく、読み返すたびに、あたらしいご論考に接する思いです。上原さんが、読んで、お書きになる「雑記」のような総括尖鋭な感想はとうてい出てきそうにありません。／「神茶・鬱塁について」は一九五一年、「平和運動の

ありかたに関連して」が一九八八年ですから、ほとんど四十年の労作です。そのうちの半分か三分の二くらいは抜き刷りなどでいただいています。いただくようになる以前のお作を拝見してまず思うことは、四〇年も前のものでありながら、すこしも古くなった感じがしないことです。すでに死んだある歌詠みが、他のある人の作品を「くりぬいた鋼鉄塊のように強靱鋭利」といったことがあります。上原さんのお作も強靱鋭利なのですが、鋼鉄の生真さはあまり感ぜられず、ヘンリイ・ムアの彫刻のように新鮮で暖かく、乳虎卣のように奇古でありながら微笑を誘うところがあります。柳田節子さんをはじめ多くの方々があなたの作品を集めて本に仕立てようという気を起こされるのは、お人柄によることは言うまでもありませんが、きっと作品のその魅力に引かれてのことに違いありません。／比較を自分のものにもってくることの不倫を承知の上でもうしますと、わたしの書き散らしてきたものは、いろいろな事情で粗漏が多く、あらためて人様の前に出せそうにもありません。それでも備忘のためにいくらかは纏めておかなければと思うのですが、人様の手を煩わすべきものではなく、ぼつぼつやらねばならないのですが、読み返すたびに魅力のなさにうんざりしてしまいます。／義務として一つ残った寺は、近親に継ぐ者がいないので、人様にお承けいただくための修理や整理をせねばならないのですが、これまた進まず、日暮れて道遠しです。／つまらぬグチをお聞かせしてしまいました。要は、上原さんの、歩いておいでになった人生の見事さと、退却戦のすばらしさを讃美したかった、というまでです。／いよいよご健康で、読書に雑記に、それから野球やマージャンもお楽しみになって、その余楽をわたしたちにも配給してくださいますように。／……／敬具〕

このような手紙を書いた後、眼圧の高くなるのがおさまったので、読み返したが、そこで語られる宋末の胡三省や明末の王夫之のように志を貫いたひとの著作のまえで、かれらのようには生きていない人間が感じるであろうたじろぎを覚えるほかに、言葉がない。

『中華文人の生活』は一九九四年一月発行。その下旬に荒井氏からもらい、電話で礼をいったが、まだ感想も述べていない。他の本の批評などあまりしない人に、見当外れの言葉を突きつけるのはためらわれるが、すでにすべての教職から去って悠々と楽しまれる閑暇に、苦笑の種を送るのは、ご愛嬌かもしれぬ。

この本もA5で六二七ページの大著だが、一人の著作ではなく、京都大学人文科学研究所の荒井氏を班長とする茂木信之、三浦國雄、村上哲見、河野道房、大平桂一、坂出祥伸、田中淡、中原健二、井波陵一、井上進、金文京、曾布川寛、合山究、大野修作、脇田晴子、日野龍夫、中島長文の諸氏の研究報告だ。「まえがき」が一八論文をたくみに紹介しているので、これをさらに縮約する。

〔時代ごとに色調を異にする、中国の文人とはどのような存在なのか。かれらの日常生活を実地検証することによりその素顔に近づいてみようと試みた。／Ⅰ序章――青木正児は「隠逸生活」こそ文人の理想の生活形態だとのべた。ただ隠逸は世捨人（日本でいう隠者）とは性格を異にする。中国の隠逸を簡明に定義すれば、社会的上層の身分にありながら職につかぬ者。孔子や朱子を隠逸と呼んでも誤りではない。／隠逸にからめて中華文人生活史を四分し、戦国末から漢代までの第一期は、経世済民から排除され「文」に偏向させられた「宮廷倡優文人」

時代。第二期の六朝は、身を朝廷におきながら「文」に対して特権的に偏向した「朝廷貴族文人」時代で、いわゆる「朝隠」が発生した。唐から元末にいたる第三期は、公私生活の分離が明確に意識される「官僚文人」時代。隠逸は思想課題から遠くなった。第四期の明清は、「市民文人」時代で、隠逸が消滅したといわれるが、実は文人社会全体に隠逸的態度が瀰漫したので「市隠」がそれを象徴する（茂木）／Ⅱ先駆者たち――唐の白楽天は、文人史上重要な人物である。社会的には「中隠」なる位置のとり方を発見し、個人的には養生術へ傾斜して、以後の文人の典型となるからである（三浦）／一〇世紀の五代は、唐と宋のはざまの乱世だが、その南唐の皇帝の中宗李璟と後主李煜には、筆硯紙墨への、道具の域を越えた愛着があり、それが宋代に顕著な社会現象となる文房趣味を導いた（村上）／古くは絵画が、社会全体の関連から眺められ、鑑戒主義的効用論が絶対優位だったが、九世紀唐代後期に鑑賞者が絵画と一対一で向き合う姿勢が現れ、北宋に至って個々人による絵画の芸術的価値の認識へと絵画観が大転換する。高雅の士が気韻生動する絵画を描き、高級な文人が絵画のよき理解者・享受者であるという理念の成立である（河野）／Ⅲその日常――文人の関心事の一つが不老不死の肉体で、それを獲得する健康法が道教の養生術。これを『遵生八牋』という書物の出版に則し（大平、田中）また『養老奉親書』などについて考察する（坂出）／中国では古来、女性が蔑視される傾向が強かったが、宋代の文人には妻を「人生の戦友」とみなすようなフェミニストが少なくなかった（中原）／一八世紀の小説『紅楼夢』を分析して、大家族内部の複雑きわまる関係性としてある秩序は、単なる抑圧機構ではなく、多様な演技によって支えられる一種の表現様式であった（井波）／役人になるのが長い間の文人の正道だったが、明末から出版業者と結びつき、ある

いは自ら出版業者となる文人が輩出する（井上、金）／文人画家董其昌（一五五五－一六三六）は既成の山水画法を抽象的に組み合わせて新しい絵画世界をひらき、技術は専門家を凌いだが、みずからの意識においては素人だった（曾布川）／文人の祁彪佳（一六〇二－四五）は、庭作りに耽溺し「寓園」という庭を作り、作庭記録の『寓山志』を著し、日記をのこした（荒井）／オカルト趣味も盛んでわが国のこっくりさんのようなものが流行した（合山）／官僚・学者・画家・古典詩人であった余紹宋（一八八三－一九四九）の主著『書画書録解題』を検討して近代中国に生きた旧文人の意識をさぐる（大野）／Ⅳ日本的変奏――日本における文人の一典型とされる三条西実隆（一四五五－一五三七）が大名や土豪に風雅を売り込むことによって、諸国を文化的に組織し、天皇家の権威を支える結果をもたらした（脇田）／一八世紀後半からの日本の漢詩にサクラが大いに歌われ出したことのなかに、日本的価値基準への覚醒をみる（日野）／Ⅴ終章――魯迅（一八八一－一九三六）は清末の士大夫の家に生まれ、幼少期は未来の文人たるべく育てられながら、自らの内なる「文人」を否定して近代中国最初の文学者に変貌した。かれから見れば文人の風流韻事は「玩物喪志」の堕落にすぎなかった。しかしそのかれも屈原に代表される「士の伝統」は信じていたにちがいない（中島）」

それぞれの論文に精疎の差はあっても、偏光プリズムのように時代によって千変万化する文人の姿の全体像が、この一冊に浮かび上がっているのは、みごとだ。強いていえば、養生に関するものが四篇もありながら、《琴棋書画》の「琴」と「棋」についての専論のなかったことが惜しまれる。

ところで個性豊かに、一癖も二癖もそなえているらしい論者たちを集めて、一〇年にちかい歳月、「江南文人

の生活」「文人の生活」などという茫漠たる主題について、研究を進めた班長の、視野の広さと、持久力の強さに、感嘆せざるをえない。しかし、これもあるいは、荒井氏の班員たちへの友情と、班員の氏への信頼とから、期せずして流れ出たものか。この本の装丁の高雅がそれを暗示する。

荒井氏は、ほぼ同じ時期に、李商隠の研究班をも運営し、精密な注釈を進め、その成果はすでに発表している。これは、形式、内容ともに、あまりにも専門的であるため、一般の読者の手もとに届きようがない。届ける作業が、氏や、元の班員だった人たちの手で進められたら、と願う人は少なくないだろう。

〔五頁から〕

utpannu lokasmi hitānukampī asmāka puṇyair iha dharma-rājā ‖34‖

カラヴィンカ鳥は、「迦陵頻伽」などとと音写し「かりょうびんが」と読み慣わし、好声、妙声、美音、美音言、好音鳥、妙音鳥などと漢訳する。ヒマラヤ山中に住み、声の美しい鳥で、卵の中にいるときにすでによく鳴き、その声を聞けば飽きることがないという。如来の音声の譬えに用いられる。極楽浄土に住む鳥ともいい、浄土曼陀羅などには人頭鳥身の形を写している（もっとも梵文阿弥陀経では極楽の鳥はカラヴィンカではなくクラーウンチャだという）。伝えによると、祇園精舎にカラヴィンカ鳥が飛んできて天空に歌い、舞い、遊ぶ姿を、妙音天女が舞曲に作り、阿難尊者に教えた。これが林邑国（いまのベトナム）に伝わり、その国の僧の仏哲が奈良時代にわが国に将来したのが、迦陵頻伽という名の舞楽だという。

劉氏の兄弟姉妹

（中国の詩人と仏教　三六）　1994 04 16　原田憲雄

中国では、前一世紀に漢の武帝が儒教を国教としてから、儒教を基盤とする倫理と制度が尊重され、文学もその倫理・制度の表現ないし宣伝の手段のように考えられてきたのです。もっとも実際には倫理にかかわらぬ美を追求するような作家があり、作品がありはしましたが、そういうものも作品を実際社会に流通させるためには、どこかで儒教の建て前を看板みたいに掲げておかねばならなかったのです。ところが道教と仏教の進出によって儒教が衰退し、美に対する儒教倫理の締めつけが緩みはじめ、それが永明文学の担い手たちのあいだで、《美の独立》の方向へ理論化され始めたのです。同じ時代の理論家であり、仏教の教養をうけて育った人でありながら、劉勰は、傾向としては復古的で、儒教の経典を尊重し、諸子百家のような思弁的なものはもとより、歴史記述や論説までも文学のうちに含めたのです。といって、かれは文学の形式的側面を無視したのではなく、インド言語学の知識によって中国語の音韻の節奏などにも注目していたので、沈約の音韻論とどちらが早かったかは微妙な問題です。ところが沈約や劉綸は形式の面に文学の重点を傾け、そのあとを追う劉孝綽は、文学と文学ならぬものを形式的な美を基準にして、切り放そうとしたのです。

中国中古の大詞華集として有名な『文選』は昭明太子の編集とされていますが、清水凱夫氏によれば、太子は発起者ではあったが、編集は名だけで、作品選択の基準設定や、個々の選出など、編集の実際の中心は孝綽だったということです。そうして『文選』では孝綽の文芸理論がほぼ貫かれているというのです。とはいっても『文

選』には詔令や表奏などの政治的文章もはいっていて、わたしたちから見ると、文学からかけ離れているようですが、それは今の日本のわたしたちの文学観があまりにも美的表現に傾きすぎているためなのです。

『文選』は、文学選集に違いありませんが、文学理論を提示するだけのために作られたのではなく、実際に文章を書くための見本帳でした。官僚文学者がその時代に作らなければならない文体は、政治的なものであろうが、宴会用であろうが、そろっていなければならないのです。ただそのばあいにも、儒教の経典や歴史の記述はあまりにも専門的すぎて、文学と呼ぶにはふさわしくないから、それらは文学のほかにカテゴリーを設けてそこに入れておけばよい、というのが孝綽たちの考えだったのです。

とはいっても、すでにある作品は理論にそって作られたものではありませんから、『文選』が孝綽の文学理論にそって編まれているとはいっても、かれの理論から食み出すような作品が入っていないわけではありません。発起者の昭明太子が好きであるとか、あまりにも有名で無視しえないとかいったいろいろな条件が加わってそうなったので、孝綽自身は買いもしなかったであろう陶淵明の作品がかなりはいっているなどはその一例です。しかし全般的にはやはり倫理性や宗教性よりは美的構成に主眼がおかれていて、それは中国の文学史では目を見張るほどの新しい特色ではありますが、一面、形式的にすぎ、平板で深みに乏しく、はじめはそのきらびやかさに感嘆しますが、やがて飽きてしまいます。比較としては突飛すぎるかもしれませんが、二〇世紀の文学や美術におけるモダニズムの良さと悪さを集約したようなものが『文選』にもあったといえましょうか。

儒教の倫理性から離れて形式的美の追求に傾く梁の文学は、仏教との関わりにおいても、その思想性や実践性

から離れて、形式の美に耽溺する傾向が出てくるのはやむを得ない必然で、孝綽の奉和詩は、まさにその見本のようなものです。

劉氏の家族の説明をしながら話がだいぶ飛躍しました。もとに戻りましょう。孝綽のすぐ下の弟の孝能は早死にします。

その下の劉潛（四八四－五五〇）は、字が孝儀。尚書殿中郎、中書郎、臨海太守など内外の官を歴任し、「平等寺刹下銘」「雍州金像寺無量寿仏像碑」などの文があり、詩に「鍾山解講」の唱和があることはさきに述べた通りです。人に対しては寛厚で、自らの行動は篤実だったそうです。

次の弟は不明で、その次のが劉孝勝。尚書左丞、尚書右丞などののち、武帝の第八子武陵王蕭紀の長史や蜀郡太守となります。五四八年、侯景が反乱すると、武陵王は武帝のもとに援軍を送らず形勢を観望し、武帝が死に、あとを継いだ武帝の第三子簡文帝蕭綱（五〇三－五五一）も殺され、侯景が帝と自称すると、武陵王は蜀の成都で帝と自称し、孝勝を尚書僕射に任じます。これが五五二年四月のことです。その年一一月、武帝の第七子湘東王蕭繹（五〇八－五五四）が江陵で帝位につきます。これが梁の第三代皇帝の元帝です。翌年七月、武陵王は官軍に破れて死にます。孝勝も捉えられて下獄しますが、元帝が許して司徒右長史に任じます。

孝勝の下の弟が孝威（？－五四八）です。太子洗馬、中舎人、中庶子兼通事舎人などを歴任、侯景の乱に台城を脱出しますが、湖北の安陸で病死します。長兄の孝綽はいつも「三筆六詩」といっていたそうです。われわれ男兄弟のうち三番目の孝儀は「筆」すなわち散文の名人で、六番目の孝威は詩の達者だ、というのです。兼ね備

えるのがおれだ、との心のこめられているのは言うまでもありません。孝綽はたしかにすぐれた才能で、皇帝はじめ多くの人から尊敬されてはいましたが、本人は鼻っ柱が強いだけでなく、人のことをぼろくそにやっつけるものですから、敵も多く、思いがけないときに思いがけないところから弾劾され、たびたび官職から離れたことがあります。そのあるときかれは、

閉門罷慶弔　閉門中でござるゆえ慶弔遠慮
高臥謝公卿　臥せっております面会ご無用

と書いたものを、門の扉に高だかと貼り付けました。さすがは詩人と、評判になりますが、なかには「なんだつまらぬ痩せ我慢を。言わなくったって誰も訪ねてゆきはせぬさ」とあざ笑う向きもあります。すると三番目の妹の劉令嫻が、

落花掃仍合　花は散っても掃けばあつまり
聚蘭摘復生　蘭の群落は摘んでも生えます

と、続く句をつくって横に貼り付けました。人が見捨てても才能のあるところへはやがてまた集まってこようし、蘭のように香り高い草むらのようなわれら劉一家は、痛めつけられてもつぎつぎに生長する、というのです。この作者が女性だというので、評判はいっそう大きくなりました。

孝綽の妹は三人いて、一人は王叔英に、一人は張嗶に、一人は徐悱にとつぎ、これが兄弟に劣らずみな文才にたけ、ことにこの令嫻がすぐれていました。張嗶にとついだひとの作品はのこっていませんが、王叔英にとつい

だ姉と令嬢のはその一部が現存します。

花庭麗景斜　花さく庭にうららかな陽かげかたむき
蘭牖軽風度　蘭かおる窓べにそよ風がわたります
落日更新妝　日の落ちるころまたお化粧をしなおして
開簾対春樹　カーテンを開けばむこうに春の木々
鳴鶯葉中響　うぐいすの鳴きごえは葉ごもりにひびき
戯蝶花間驚　ひらひら蝶が花むらを飛びまわる
調琴本要歓　たのしむつもりで弾きはじめた琴の音も
心愁不成趣　ふさいできた心に調子が出ないのです
良会誠非遠　まもなくお帰りとは思うのですが
佳期今不遇　約束もいまの気持の間にあいません
欲知幽怨多　このかなしみをお知らせしようと思ううち
春閨深且暮　部屋ふかく春の日は暮れてゆきます

これは令嬢が旅行中の夫にあてた詩で、『玉台新詠集』におさめられ、有名な作品です。俳が亡くなったとき、俳の父が祭文を作るつもりだったが、すでに出来ていた令嬢の文がすばらしいのでやめた、という話も伝えられています。